

600字物語004

一人と一匹

作者：エリー

わたしは毎日黒猫と話す。

出会いは三年前、小学一年の時だった。

河原の段ボールに捨てられていた。まだほんの子猫で、真っ黒い毛並みに、黄色い真ん丸いクリクリした瞳がかわいらしかった。

動物が苦手で、怖くて触れないわたしでも、見詰め合ったら目が離せない魅力があった。

わたしは、誰か拾ってくれないかと隠れて毎日様子を見に行った。

そして子猫はいなくなった。拾われたのか、迷子になったのか、死んでしまったのか分からなかった。行方が気になってしかたがなかった。

それから二年経ったある日、通学路の途中の家の塀に黒猫が待っていた。すっかり大人になって、どどんと大きくなっていたが、クリクリした瞳は変わらなかった。すぐにあの時の子猫だと分かった。赤い首輪をしていた。

黒猫は、雨降り以外、毎日待っていた。

わたしは、思い切ってちょっと離れた玄関脇に座った。黒猫は逃げなかった。

ある日、話しかけてみた。するとにゃあと鳴いて、尻尾をクネクネ揺らした。わたしは応えてくれて嬉しくなった。弾んで帰った。

それから会うたびに、いろんな話をした。

いつも待っていて、いつでも話を聞いてくれる。黒猫とわたしは、いつの間にか友だちになっていた。

繰り返されるリズムは永遠を感じされた。

世界は、一人と一匹のためにあった。